

[シンポジウム] 世界に輝く国際活動

メキシコ大地震への国際緊急援助隊派遣 ～海保救命士として救助チームに参加～

第九管区海上保安本部新潟航空基地 機動救難士
渡邊 翼

【海保の国際協力について】

海保における諸外国との連携・協力業務の一環として国際緊急援助活動があり、救助チームへは平成8年から参加している。

【国際緊急援助隊救助チームとは】

救助チームは警察、消防、海保、医師等で構成され、都市型搜索救助のエキスパート集団である。都市型搜索救助とは、ビルやマンションが倒壊した際に生き埋めとなった要救助者の搜索および救出のことで、そのために必要な特殊な器材や技術を持つ。救助チーム登録隊員は定期的に集合し、リアルな災害現場を再現した訓練施設において訓練を実施している。訓練内容は、警察犬や熱画像カメラ等を使った搜索技術、削岩機等を使った掘削技術、油圧ジャッキ機等を使った重量物の除去技術、木材を使った建物補強技術、高所でのロープを使った吊上げ吊下ろし技術、圧外傷の傷病者に対する処置技術と多岐に渡り、これらを国外で実施することを前提として訓練している。

【メキシコ地震対応について】

平成29年9月20日午前3時（日本時間）、メキシコ中部モレロス州においてマグニチュード7.1の地震が発生した。同日メキシコ政府から救助要請があり、JICAから各庁へ国際緊急援助隊隊員の拠出要請があった。翌朝、72名が成田に集結し、11時間の飛行時間を経てメキシコ入りした。限られた時間の中で生存者を救うため、直ちに作戦が決定された。2チームに分かれ、日本から持ち込んだ10トンの器材とともに同時に別々の現場に取り掛かった。私が属したチームは7階建ての倒壊マンションに対応した。押しつぶされた床と天井の隙間から死亡確認された手が見えた。生存者を探するため屋上に上がると、ビル自体が傾き不安定な現場だった。成果を出す前に、他国のチームが大型クレーンを投入することになり、我々は転進することになった。1時間の仮眠後、

次の現場に向かうと、そこは更に不安定な6階建ての倒壊マンションだった。声が聞こえた階層に集音マイクを挿入すると、うめき声が確認された。直ちに医師とクラッシュ症候群だった場合の輸液を含む打ち合わせを行った。現場は常に崩壊の危険があり、緊急退避する場面もあった。木材で補強しながら穴を掘り進め、這いつくばって前進するも、要救助者は発見できず、その代わりに、飼い犬を発見して飼い主のもとへ帰すことができた。その後マンション住人の安否は確認され、救助チームの搜索救助活動が終了した。

【まとめ】

今回、現場においてクラッシュ症候群が疑われ、医師と輸液の準備をした。結果実施しなかったが、国際緊急援助隊にメディカルコントロールは確立されておらず、医師との念入りな打ち合わせに時間がかかり、心細い中の活動だった。よって救助チームとのメディカルコントロール構築の必要性を強く感じた。また、日系の学生ボランティアが危険な屋上現場等に同行してくれ、他国チームと円滑に作業をすることができた。さらに泊まった宿営地は日系人が建てた、いざと言うときに避難できる施設で、屋根の下で寝ることができ、体力を消耗することなく、活動に集中することができた。こういった関係も日本がメキシコと築いてきた歴史の恩恵だと、先人に感謝した。この活動を通し、国境を越え手を取り合うという意義を学ぶことができた。またシンポジウムをとおして、異なった方面の活動が、国外において、日本の活動として合体し、大きな影響を与えているのも感じることもできた。

